



## 〈雑録〉英吉利ノ過去, 現在及ビ將來(2)

大西, 猪之介

---

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 8(2):317-335

(Issue Date)

1910-02

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051517>



# 英吉利ノ過去現在及ビ

## 將來 (其二)

高商專攻部

### 大西猪之介

前號ニ於テ吾人ハ英吉利過去ノ繁榮ト其變遷ヲ説述シテ遂ニ英吉利滅亡説ニ及ビ其到底贊ス可カラザルヲ論ジテ筆ヲ措ケリ。サレバ以下吾人ハ英米同盟説ノ由來ヲ叙シ、之ガ内容ヲ檢シテ(一)感情ノ上ニ立ツモノ(二)軍事上ノ理由ニ基クモノ(三)經濟上ノ霸權ヲ慕フモノ、三ニ分チ、逐次之ガ評論ヲ試ミ、結局英米同盟説ニ依テ失墜セシ勢威ノ恢復ヲ期セントスルハ一個ノ空想ナル可キコトヲ斷ジテ帝國主義論ニ入り先ヅ其意義ヲ確定シ、其沿革ヲ略述シキツブリングノ前ニテニソニアリ、チヤンパレーンノ前ニチスレリーアルコトヲ證

シ、項ヲ改メ英獨海軍競争ヲ論ジテ英國軍備今後ノ充實ハ軍事的大英帝國主義ニ求ムルノ外ナク又實ニ此ノ主義ハ漸次完成サレントスル形勢アルコトヲ記シテ讀者ノ高教ヲ仰ガザル可カラザル順序ナレドモ、カクテハ文甚ダ長キニスギテ罪ヲ本誌ト讀者トニ負フ所少カラザル可キヲ思ヒ、茲ニ以上ノ三節ヲ省略シテ直ニ經濟的大英帝國主義ニ入ラント欲ス。

## 經濟的大英帝國主義

半既ニ成リ而テ近キ將來ニ完成セラレントスル軍事的大英帝國主義ハ果シテ、ヨク英國々運ノ長久ヲ保スベキカ。英國ノ將來ハ此ノ一舉、以テ牢トシテ動カザルコト果シテ磐ノ如クナル可キカ。曰ク大ニ然ラズ。夫レ國貧ノ民餓エ而テ權勢尙ホ永ク續キシ國未ダ嘗テ之レ有ルナシ。砲火ノ間能ク敵ヲ壓シテ利ヲ得ントモ財力之ニ伴ハザレバ到底終局ノ勝利ヲ完ウス可カラズ。疑

フ者ハ、乞フ、日露戰役ノ結末ヲ見ヨ。南阿戰爭ノ歴史ヲ讀メ。否ナ十八世紀ノ英國ヲ思ヘ。獨リ富ミタル (allein reich) 英國ガ早ク西班牙王位繼承戰爭ニ於テ、又殊ニ佛國革命戰爭及ビナポレオン戰爭ニ於テ頻々補助金ヲ給シテ歐大陸ノ連衡ヲ維持セシ跡ヲ回顧セヨ。(註一) 英國富マザル可カラズトハ實ニ是レ當面ノ要求ニ非ルナキヤ如何。

註一 Schütz-Gaevernitz, Britischer Imperialismus und englischer Freihandel zur Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts, Leipzig, 1906, s. 7.

而テ事ノ現狀ニシテ變ゼザラムカ、既ニ危殆ニ瀕セル英國ノ經濟上ノ地位ハ目ト共ニ益々悲境ニ沈淪ス可キノ徵候歷然タルコトハ前號ニ於テ吾人ガ叙述シタル所、若シ夫レ英國民ニシテ自國々運ノ禍機ヲ目撃シ乍ラ拱手無爲ニ安ンズ可クンハ即チ止ム、苟モ霜ヲ踏ンデ堅氷ノ至ル可キヲ悟リ、而テ奮起一番スル餘勇ノ存スルア

ランニハ、必ズヤ何等カノ方策ヲ執テ現状ヲ打破セザルヲ得ズ。然ラバ如何ニシテ現状ヲ打破ス可キカ。問題ハ茲ニ轉ジテ英國不振ノ原因ノ探究トナル。蓋シ原因ノ探究ハ即チ革新策ノ探究ナレバナリ。

凡ソ一個ノ社會現象ヲ捉ヘテ其起因ヲ求ムルハ頗ル難シ。殊ニ事一大帝國ノ興亡ニ關スルガ如キニ至テハ愈々其然ルヲ覺ユ。然レバ今ノ世英國產業衰頹ノ原因ヲ説クモノ異論紛々歸一スル處ヲ求ムルニ由ナシト雖モ、吾人ヲ以テ見レバ略左ノ三點ニ歸ス

### 第一 教育ノ不備

人若シ現代ニ於ケル

獨逸興隆ノ原因中最モ根本的ニシテ且ツ最モ重要ナルモノハ即チ教育制度ノ完備ニアリ、就中國國產業ノ發達ガ主トシテ實業教育ノ賜ナルヲ知ラバ(註二)大那破翁ノ馬蹄ニ蹂躪サレ一意他日ノ復仇ヲ希ヒシノ際先覺ノ士ガ眼ヲ教育ニ注ギタル達見ニ驚カン。然ルニ今轉ジテ英吉利ノ

教育制度ヲ顧ミンカ、吾人ハ其獨逸ニ劣ルコト甚シキヲ見ズンハアラズ。オックスフォードアリケンブリッヂアリト雖モ、養フ所ハ紳士的人格ニシテ必ズシモ近世的、更ニ適切ニ云ヘバ實務的人格ニアラズ。國民普通教育ガ發展ノ道程ニ登リシハ漸ク近年ノコトニ屬シ殊ニ宗教問題ニ阻害セラレタルヲ以テ一般勞動者ノ知識獨米ニ及バザルノ觀アリ。(註三)又實業教育ノ如キモ輓近之ガ創設ヲ見タルガ如キノ狀ニアリ。斯ノ如クシテ工業上ニハ機械ノ利用改良ニ一步ヲ獨米ニ輸シ、商業上ニハ外國語學力ノ缺乏ニ依テ其商業旅行人(Commercial Travellers)ハ充分市況ニ通ズル能ハザル遺憾アリ、相助ケテ隙々ノ間、小ニシテハ英國產業ノ進運ヲ妨ゲ、大ニシテ英國々勢ノ隆興ヲ害セシコト決シテ少シトセザルナリ。

註二

此ノ點ニ就テハ Earl Dean Howard, The Course and Extent of the Recent Industrial Progress of Germany ノ第

六章(河上學士ノ譯文アリ、國家學會雜誌第二十卷第六號四八—五九頁「獨逸産業ノ發達及其原因」)及ビ戶田海市氏著我獨逸觀第二章四一乃至八十二頁ニ詳細ナル調査アリ。

註三 Clive Day, A History of Commerce, New York, 1907, p. 383

## 第二 保守ノ氣風

英人ノ如ク自信強キ國民ハ甚ダ稀ナリ。而シテ自信ハ變ジテ自尊トナリ、自尊ハ化シテ保守トナル。保守ニ傾キシ英人ハ顧客ノ嗜好ヲ顧慮セズ、競争者ノ出現ニ注意セズ、舊慣ヲ株守シテ動カザル事百年、毫モ進取發展ノ意氣ヲ有セズ。而テ商權漸ク其手ヲ離ル、ヲ知ラザルナリ。サレバ有識ノ士ハ風ニ英國民ヲ戒メテ舊來ノ盲目的自信ヲ除カントシ、カーカッブノ如キハ「吾人ガ世界獨歩ノ工業國タリシ間ハ這般ノ自信モ無害ナリケムト雖モ、今日唯主要工業國ノ一タルニスギザル時勢ノ下ニ於テハ、此ノ自負タルヤ啻ニ有害ナルノミナラズ、實ニ吾人ヲシテ死地ニ陷ラシムベキ

モノタリ」ト激語シ(註四)ベラール亦冷罵滔々數千言、思ハズ吾人ヲシテ痛快ヲ叫バシムルニ至ル。乞フ、左ニ其大意ヲ紹介セン。

英人ハ近世ニ於ケル羅馬人トナレリ、——其謹嚴ニシテ從順ナル公民タル點ニ於テ、又其勇壯ナル征服者タル點ニ於テ然カモ彼ハ無智蒙昧ニシテ新時勢ニ順應スルノ術ヲ知ラズ、頑トシテ舊慣ヲ墨守セリ。

パーミンガムノ豪閥朝其事務所ニ至リ布哇ノ鐵商ガ政府事業ニ要スル門ヲ注文シテヨリ九ケ月、未ダ其荷着ヲ見ザルヲ駭ケル書ヲ讀ミテ思ヘラク「何ゾ其性急ナルコト此ノ如キヤ」ト。パハマノ商人ハ通信スラク「貴店ノ鋸ハ高ク且ツ舊式ニ失ス。又粗雜ニ鼠色紙ヲ以テ荷造セラル、ガ爲航海中鏽ヲ生ジテ陳列スル時甚ダ見スボラシキニ反シ、米國商人ハ鋸ヲ送ルニ「ボール紙」又ハ木箱ヲ以テスルガ故、人氣大ニ宜シ」ト讀デ思ヘラク「鋸ヲ箱入ニテ送ルトハパーミンガムアツテ以來未ダ曾テ聞カザル所、吾人ガ彼等ノ爲ニ古來ノ習慣ヲ變ズ可シト思惟スルハパハマノ黑奴ハ御人好シナル哉」ト。トリニダッドノ荷受人ガ「御送附ノ販賣委託品洋燭ハ送還ヘ。米品ハ英品ヨリモ手頃ニシテ輕ク其意匠珍奇ナレバ英品ノ賣行ナシ」ト記セルヲ見テハ思ヘラク「此ノ粗野ナル人民ヲ喜バシメントスレバ吾等ハ日々新意匠ヲ發明シテ新型ヲ作ラザル可カラ

ザルガ如シ。コレ豈ニ爲シ得ベキ所ナランヤ」。

(以上ノ諸書翰ハ皆著者ガ領事ノ  
報告ヨリ拔萃シタルモノナリ)

ト筆ヲ極メテバーミンガム商人ノ保守怠惰奢侈  
ヲ罵リ其遂ニ起ツナカラント諷シ更ニ進ンデ曰  
ク。

富テ且ツ貴族のナル英人ノ製品ハ高價ナリ、彼ハ貧民ノ需  
要、他方面ニ存スルヲ覺ル能ハズ。又安價ナル獨逸製品ヲ蔑  
視スルヲ知テ其一般ノ要求ニ適セルヲ知ラズ。加之自國全盛  
ノ時代ト同ク殖民地人民ハ勿論信用最モ厚キ端西人ニ對シテ  
スラ代金ノ現金拂或ハ先拂ヲ命ジ、又不便極マル度量衡貨幣  
制度ヲ改メズ。

今ヤ最モ極端ナル保守主義者ト雖モ又最モ樂天的ナル國粹  
保存家ト雖モ、若シ此種ノ缺陷ニシテ矯正セラレザラムカ、  
時ニ一時的成功又ハ恢復ノ現ハル、アラムトモ、英國ノ將來  
決シテ永カラザルベキヲ覺悟セザル可ラズ云々。(註五)

堂々タル立論、行ルニ輕快ノ筆ヲ以テシテ英人  
保守ノ氣象ト其商權ニ及ボス影響トヲ說テ眞ニ  
肯綮ニ當ルヲ覺ユ。(註五) 知ラズ、英人ノ之ニ對  
シテ有スル答ヤ如何。

註四 Thomas Kirkup, Progress & the fiscal Problem, Lond-

on, 1905, p. 100.

註五 Victor Bérard, British Imperialism and Commercial

Supremacy, trans. by H. W. Foskett, London, 1906, p.p.

78-90 & p. 290-291

註六 テーノ著書亦此種ノ叙述ニ富ム。煩チ厭ヒテ茲ニハ引

用セズ。詳シクハ前掲三八二—三八五頁參照、尙ホ

H. Perry Robinson, The 20th century American, New

York & London, 1908, p.p. 375-377 ニハ趣味アル實例

アリ。

### 第三 貿易政策ノ不權衡。 英國ハ一八四

六年以來純乎タル自由貿易主義ヲ奉ジ、從テ極  
端ナル財政關稅主義ヲ守リ内地稅ニモ之ヲ應用  
セル結果、僅少ナル輸入稅目ヨリ簡單ニ又容易  
ニ巨額ナル輸入稅金ヲ收ムルノ利益ニ浴シツ、  
アレドモ、之ト同時ニ稅目少キニ失スルノ結果  
一面ニ於テ當然課稅ノ目的物タル可キモノニモ  
課稅スルヲ得ズシテ負擔ノ不公平ヲ生ジ、他面  
甲稅ノ收入不足ヲ乙稅ノ收入増加ニ補フノ途ヲ  
缺キ、又非常ノ事變ニ備フ可キ財源ニ乏シキヲ  
告ゲ、更ニ課稅品ニハ負擔力ノアラン限リ稅率

ヲ高カラシムル必要アルガ爲ニ、茶珈琲砂糖ノ如キ生活ノ必需品ヲシテ非常ノ高價ニ登ラシメ乍ラ尙ホ充分ノ收入ヲ得難ク、勢ヒ内地稅増徴ノ止ムナキニ至リ工業生産品ノ租稅負擔額即チ生産費ヲ増加セシムル缺點アルノミナラズ、世界ノ主要ナル諸國ガ一八七〇年以降漸次保護貿易主義ニ傾キツ、アルト相俟ツテ二様ノ方面ヨリ著シク英國工業ノ競爭力ヲ減殺スルノ不利ヲ讓シツ、アルヲ見ル。二様ノ方面トハ何ゾヤ。保護貿易國ニ於ケル販路ノ縮少其一ナリ。英本國內ニ於ケル市場ノ不安其二ナリ。而テ彼ノ販路ノ縮少ト此ノ市場ノ不安トハ相合シテ同國工業ノ大規模作業ニ障害ヲ與フ。國際交通發達シ容易ク新技術新機械ノ獨占ヲ許サルヨリ、工業上ノ優勝劣敗ハ原則トシテ報酬漸増ノ法則適用ノ程度如何ニ係ル今日、大規模作業ニ與ヘラル、障害ノ如何ニ恐ルベキ結果ヲ呈スルヤハ言ヲ俟タズシテ知ルベキニアラズヤ。

惟フニ最も多數ノ國家ニ於テハ從價一割乃至三割、合衆國ニ於テハ七割二步、露國ニ於テハ十三割ニスラ達スル重稅(註七)ノ負擔ガ英國主要輸出品ニ及ボスベキ影響ノ如何ハ自ラ推スルニ難シセザル所、此際此時「這般ノ重稅ハ決シテ英國ヲノミ標的トスルモノニアラズ、最惠國條款存セル以上輸入稅ハ英國ヲ苦シムルト等シク他ノ競爭國ヲモ苦シムルモノナリ」ト云フ(註八)ハ辯疏ヲ成サズ。何者國定稅率ノ制定ハ制定國特殊ノ政治的經濟的社會的必要ニ基キ、之ニ對スル稅率ノ協定ハ協定國ノ利害關係深キ主要輸出品ニ就テ行ハル、モノニシテ、該輸出品ハ必ズシモ英國ノ輸出重要品ト一致スベキニアラズ。サレバ競爭少キカ或ハ全然之ナキ商品即チ英國自ラ其大部或ハ全部ヲ供給スル物品ニ付テハ何等協定ヲ求ムルノ途ナク(未開後進國ニ對シ權力率ヲ約セシムル)シテ直接ノ打撃ヲ被ル可ク(註五)縱如キ場合ヲ除ク)令然ラズ凡課稅額ノ限度ニ於テ當該國ノ工業ニ

對シ劣等ノ地位ニ立テテ其販路ヲ失ヒ、其販路ヲ失ヒタル範圍ニ於テ大規模作業ヲ礙ゲラレ、爲ニ爾餘ノ商品個々ノ生産費ヲ高メ其競争力ノ減少ヲ來セバナリ。

註七 Clive Day, 掲 P. 386.

註八 Asquith, Trade & Empire, London, 1903, p. 13

註九 露國ニ對スル英獨兩國貿易ノ消長ノ跡ヲ見ヨ。(二)ノ末節參照)而シテ英國ハ露國產物ニ一般ニ無稅輸入ヲ許シ獨逸ハ有稅輸入ヲ行ヒ乍ラ此ノ結果アリトスレバ貿易政策ノ差異ヨリ生ズル不利ノ如何ニ大ナルヤ驚クニ堪エタリト云フ可シ。

斯ノ如クニシテ英國ガ頑然自由貿易主義ヲ標榜シ廣ク無制限ニ内地市場ヲ開設シ自他ノ産業ヲ通ジテ一視同仁一切平等ノ待遇ヲ確保スル結果、外ニ對シテハ貿易政策上最モ重視セラルベクシテ然モ列強對外商政決定上全然無勢力ナリテフ頗ル奇怪ナル地位ニ陥リ、内ヲ顧ミレバ豊富ナル購買力ヲ擁シ乍ラ内國産業ニ堅固ナル立脚地ヲ提供シ得ザルノミナラズ、一朝不幸ニシ

テ市況不穩ノ形勢ヲ呈シ生産過剩ノ聲ヲ耳ニスルニ際シテハ即チ先ヅ投賣場(Dumping Field)ニ供セラル、ノ不利ヲ免レズ。

夫レ市場生産(Marketproduktion)ナル一語ハ自ラ吾人ヲシテ其裡面ニ潛メル過剩生産(überproduktion)ヲ想起セシム。原因ノ那邊ニ存スルニ拘ラズ、一國ノ生産力ニシテ内地消費力ノ上ニ出デム時、之ヲ自然ノ經過ニ放任セハ必然物價ノ下落トナラザルヲ得ズ。然リト雖モ一意營利力ノ大ヲ是レ希フ今日ノ生産者ハ輕ロシク自家ノ生産規模ヲ縮少セムコトヲ欲セズ、ヨシ企業家ニシテ之ヲ欲スルモ資本主義ノ大規模作業組織ハ容易ク之ガ縮少ヲ行ヒ得可カラズ。即チ販路ヲ海外ニ求メテ以テ市價ノ維持ヲ謀ル。保護ノ障壁高ウシテ外敵侵入ノ恐ナク、企業ノ聯合固ウシテ内寇勃起ノ憂ナキ邦國ニ在テ殊ニ然リ而テ此際其投賣場タルベキ最良ノ市場ハ即チ全ク自由貿易主義ノ國家タル英吉利ナリトス。東

西南北經濟關係ノ連鎖頗ル密ナル今日ニ在テハ  
一國ノ生産過剰ヲ嘆ズル時ハ即チ他國亦同様ノ  
嘆聲アル可ガ故ニ、獨米ノ市況ノ不順ナルニ由  
テ英國ニ投資(Dumping)セラレムニハ、然ラヌ  
ダニ需要ノ減少ヲ憂フルモノ愈々激キヲ加ヘ、  
英國同種産業ノ苦痛ヤ蓋シ測リ知ル可カラザル

モノアラム。固ヨリ投資ニシテ所在場合ニ上述  
ノ如キ生産過剰或ハ其他ノ一時的必要ヨリ出ヅ  
ルモノナラムニハ必ズシモマネーノ言ヘルガ如  
ク「生産費以下ノ輸出ハ恐ル可キ競争ニアラズ  
何者是レ唯一時的ノ現象ニスギザレバナリ」(註  
十)トシテ平然タルヲ得ザルニアラズト雖モ、營  
業ノ常則トシテ大規模經營ノ利ヲ完ウセムガ爲  
ニ組織的ニ且ツ規則正シク行ハル、モノ(註十一)  
ニ至テハ自國産業ノ被ル損害前者ノ比ニアラズ  
シテ到底這般ノ見解ニ安ムズ可カラズ。(註十二)

註十 L. G. Chiozza Money, Elements of the Fiscal Problem,  
London, 1903, p. 141.

註十一 カーカッブノ言能ク之ヲ添ス。曰ク外國市場仕向ノ

爲必要以上ノ生産チナスハ米國ニ於ケル會社ノ常則ト  
看テ可ナリ。實務ニ通ゼシ人ハ或物品一萬個ノ前半ト  
後半トガ均シク五千個ナリトハ云ヘ其生産費ニ著シキ  
差等アルヲ熟知セム。組織存シ、労働者存シ、機械器  
具亦存ス。餘分ノ生産ニハ必要ナル分量ノ原料ヲ加ヘ  
必要ナル時間機械ヲ運轉セシムレバ足ル。後ノ五千個  
ノ大ニ安キ所以ナリ。

而シテ保護サレタル内地市場ニテ前半五千個ヲ高價ニ  
販賣シ得ベキガ故ニ殘餘ヲ海外市場ニ格外ノ安價ニテ  
賣放シモ全體ニ對スル利益ハ内地市場ニノミ踴躍セル  
場合ニ比スレバ大ニ大ナルベシ。縱令之ガ爲ニ海外同  
業者ヲ壓迫シ甚シキニ至テハ彼等ヲ倒産セシムトモ何  
ゾ意ニ介セン。企業家ハ正ニ言ハン「吾人ハ唯市場事  
情ニ順應セルノミ。設夫レ爲ニ雷ニ英國ト云ハズ、本  
國ト限ラズ、廣ク世界ニ存セル競争者ヲ驅除シ得ムニ  
ハ多々益々可ナリ」ト。(要註P. 171.)

註十二 アペブリー卿ノ如キハ此ノ兩場合ニ區別ヲ設ケズ酒  
酒トシテ樂觀說ヲ吐露シテ曰ク。

外國ノ投資ヲ憂フル聲ハ最モ注意スベキ禍患タリ。若  
シ必要存セザラムニハ何スレゾ之ヲ買ハンヤ。既ニ必  
要存ス。外國ニシテ無代以テ吾人ニ贈ランニハ更ニ妙  
ナラズヤ。賣ル所愈々高クシテ買フ所廉ナランニハ益

々妙タラズンバアラズ。人誰カ所要品ヲ購フニ高價ヲ拂ハンコトヲ望ミ或ハ物價ノ低廉ニ赴クヲ以テ自己ノ利益ヲ侵害セラレタリト思フモノアラムヤ。個人ノ上ニ下セル此ノ觀察ハ吾人全體ノ上ニモ適用スルヲ得ン更ニ進ンテ特殊ノ商品ニ付テ考フルニ悲觀論ノ不理層一層明瞭トナル。吾人ハ茶珈琲棉花羊毛等ニ對シ更ニ高價ナル支拂ヲ成サムト欲スルヤ。廉價ニ光線ヲ得ルハ大ナル恩惠ナリ。此ノ點ニ於テ石油ノ價益々廉ナラバ益々可ナルニアラズヤ。夫レ太陽ハ無代價ニテ吾人ニ熱ト光トヲ給ス。借問ス。是レ果シテ罪惡ナリヤ。……吾人ヨリ日光ヲ奪ハムトスルガ愚舉ナリトセバ石油ノ價チ高カラシメムトスルモ亦愚是レト相讓ラザルコトヲ忘ル可カラズ。希クハ銘記セヨ石油ニ關スル以上ノ議論ハ一般ニ適用シ得ベキ眞理ナルコトナ。(註註P.170-172)

卿ノ議論ハ一面ヨリ云ヘバ眞理ニシテ他ノ一面ヨリ言ヘバ謬妄タリ。世界主義の或ハ個人主義の見地ヨリスレバ一定不動ノ眞理ニシテ國家主義の標準ヲ以テ見レバ全然實ス可カラザル辭說ナリト云フ可シ。細論スレバ

(一)個人ノ利ハ必ズシモ國家ノ利ニアラズ。

(二)單ニ安價ナリト云フモ唯一時的ナルアリ又永遠ニ

巨ルアリ。一時ノ安價ニ眩惑サレテ永遠ノ安價ヲ捨タルハ愚是ヨリ甚シキハナシ。

(三)安價ノ購入ガ利益ナリヤ否ヤハ内國ニ同種産業アル場合ト否トニ依テ區別セザルヲ得ズ。茶珈琲棉花羊毛石油太物等ニ關スル議論ノ當否ハ此ノ點ヨリ判ズルヲ得ベシ。

サレバ極力保護貿易主義ヲ否定シテ止マザルアガシイストラ尙ホ自由貿易主義論ハ投資及ビ輸出獎勵金ノ二場合ニ於テハ到底破レザルヲ得ズト成シ投資ノ弊害ヲ説イテ餘蘊ナキヲ見ル。曰ク

現在獨人ノ供スル製品ハ英人ノ品ニ比シテ確ニ低廉ナリ。然レドモ其ガ果シテ永ク繼續スベキモノナリヤト問ヘバ蓋シ否定ノ斷案ヲ下サメルヲ得ズ。何者獨品ノ價ハ今日獨人ニ取テ最も適當ナリトセラル、價ナルニスギザレバナリ。思フニ獨人ハ生産過剩ノ曉ニハ直ニ英國ニ搬シテ損失ヲ免レ得ルニヨリ自家製品ニ對スル需要測定上甚ダ自由ナルヲ得ルニ反シ英國ノ製造家ハ當ニ正當ナル需要額ヨリモ稍少額ノ生産ヲナシテ以テ投資ニ對スル餘地ヲ供ヘ置クヲ要スルノミナラズ、其餘地ノ程度如何ノ決定ニ多大ノ困難ヲ感ゼザルヲ得ズ。此ノ結果獨人ハ恣ニ需要以上ノ生産ヲナシ

テ之ヲ廉價ニ供給スルヲ得ベク、英人ハ正當ノ需要額ヲ生産シ得ムニハ一層廉ナラシメ得ベキ生産費ヲ強テ自ラ高カラシメザルヲ得ズ。勢既ニ此ノ如シ。英人タルモノ焉ンゾ日新ノ機械ヲ利用シ、又前途ヲ觀望シテ一層經濟的ナル經營ヲナシ得ムヤ。

カクテ獨人ハ不景氣ニ會スルモ相應ノ取引ヲナシ得ベク、好景氣ニ際シテハ充分ノ利得ヲ收ムベシ。然ルニ英人ハ不況ニ際シテハ當然之レニ伴フ惡影響ハ勿論、更ニ投資ノ大害ヲ被ムリ若シ之ヲ免レムト欲セバ餘儀ナク業務ノ規模ヲ縮少セザル可カラズ。爲ニ幸ニ景氣恢復スルモ充分ノ利益ヲ得難ク、供給不足シ、物價騰貴シ、徒ニ外品ヲシテ大利ヲ吸ハシムルニ至ル。

以上ノ理由ニヨリ獨逸ノ生産費ハ愈々安ク英國ノ生産費ハ益々高シ。今ヤ英國製造家ヲ保護スルニ非ザレバ其弊ノ及ブ所知リ難キモノアラム。若シ保護ヲ與ヘムカ、獨人ハ其輕佻ナル態度ヲ改ムルヲ要ス可ク、英人ハ更ニ活潑ナル行動ニ出ヅルヲ得ベク、市況不振ニ際シテハ獨人亦英人ト同様ノ打撃ヲ被ル可ク、好況ナルニ當テハ英人亦獨人ト同様ノ利益ヲ得ベキニ至ラムニヤ。(Henry A. Agacy, Free Trade, Protection, Dumping, Bounties and Preferential Tariffs, London, 1903, p.p. 47-49)

競争者ヲ擊破シテ海外市場ヲ獨占シ以テ永遠

ノ巨利ヲ博セムトスル畫策ハ果シテ其效ヲ奏スベキヤ否ヤ、將又一旦獨占ノ域ニ近クトスルモ新ナル競争者ノ出現ニ依テ徒勞ニ歸スルノ憂ナカルベキヤ否ヤニ至テハ輕々シク論斷ヲ下スヲ許サズ。然リト雖モ、世界經濟ノ大勢ニ鑑ミ、産業合同ノ將來ヲ察スレバ、吾人ハ到底アスキスノ『投資ハ内國消費者間ニ激烈ナル反動ヲ起シ其反動ハ怨恨トナリ、憤怒トナリ、激昂トナリ保護ノ廢止トナツテ』投資ノ絶滅トナルテフ樂天的管見(註十四)ニ贊意ヲ表スル能ハズ、又時勢ノ推移ヲ解セズ、學說ノ由來ヲ悟ラズ、「最廉ノ市場ニテ購入セヨ」テフ一語ヲ金科玉條トナシ、營ニ一時ノ最廉ニ戀々トシテ永遠ノ最廉ヲ捨ツルヲ辭セザルノミナラズ、「國防ハ遙カニ豪富ヨリモ肝要ナリ」トノ千吉不磨ノ卓見ヲ捨ツルコト泥土ノ如カラントスルアベブリー一派ノ議論註(十五)ヲ讀ンデハ徐ロニ福田博士ト共ニ(註十六)

「後世天下ヲ謬リタルモノハ實ニアダム、スミス

其人ニ非ズシテ其ノ祖述者ナリ、其門流」ナルコトヲ嘆ゼザル能ハズ、而テ遂ニ六十年前リストガ獨逸國民ニ與ヘタル警告ヲ移シテ昔日ノ投資王(Champion Dumper)タル英國人ニ呈セザルヲ得ザルナリ。曰ク。

世界商工業ノ中心タル地位上英國製造所ノ供給ハ時ニ過多トナル。此ノ時英國人ハ皆其商品ヲ汽船ニ投ジテ漢堡伯林フランクフルト紐育ニ廻送シ實價ノ半額ヲ以テ賣出シ、暫時苦チ受クレドモ直ニ救ハレ、後ニハ好值ヲ以テ自ラ損失ヲ償フニ反シ、獨米製造家ハ爲ニ甚シキ悲運ニ陥ル。英國ハ火事ヲ見、爆發ノ報ヲ聞ケドモ破片ハ他國ニ落チ、其人民爲ニ傷害チ受ケタリト嘆ズレバ仲買商人ハ答ヘテ曰ク「是レ凡テ恐慌ノ罪ノミ」ト。然カモ這般ノ恐慌ノ爲ニ英國ト共ニ自由競争場裡ニ立テル諸國ハ其製造力、信用組織、農業及ビ經濟組織ノ全體ニ亘リ根本的動搖チ感ジ乍ラ後日再ビ高價ナル英品ヲ購フテ英人ノ損失ヲ償ハザル可カラズト云フニ至テハ、吾人遂ニ價值說及ビ世界主義ノ空理ニ依テ定メラル、國際貿易ノ現狀ガ果シテ其當チ得タルモノナリヤ否ヤニ付キテ大ニ疑ナキ能ハザルナリ(註十七)

註十四 一九〇三年十月三十一日ベーズリニ於ケル演說

(Trade & Empire, London, 1903, p. 63.) 尙キ投資國ニ

リ見タル投資ノ利害ニ付テハ國民經濟雜誌第四卷第五號ニ於テ公表セラレタル周到精緻ノ論文アリ。願シテ「企業聯合及ビ合同ノ輸出獎勵策」ト云ヒ。恩師關東京高等商業學校講師ノ筆ニ成ル。讀者ノ熟讀ヲ要求ス。

註十五 本節註十六參照

註十六 經濟學研究三版經濟單位發展史上韓國ノ地位一五八

頁

註十七 F. List, The National System of Political Economy trans. by Hosiid, London, 1904, p. 119

論ジテ茲ニ至ラバ吾人ハ雷ニシユルツエ、ゲヴァーニッツガ獨逸工業組織發展ノ有力ナル原因ヲ自由ニ英國市場ニ侵入シ得タルコトニ歸セル(註十八)所以ヲ首肯スルニ難カラザルノミナラズ、エリス、バーカーガ熱烈ノ辭、曩日ノ熟練高給ノ高等勞働者ヲ化シテ未熟低給ノ下等勞働者タラシメタルモ、富裕一世ヲ拔ンデタル英國ヲシテ世界中最も多數ノ貧民ヲ有セシムルニ至リタルモ、嘗テ原料ヲ輸入シ製品ヲ輸出シタル獨逸ニ對シ原料ヲ供給シ製品ヲ購入スルコト、ナ

Work for British Workers" by J. E. Barker.

註二十 福田博士、經濟學研究三版「トマスダキノノ經濟學說」七頁—八頁

リタルモ、少壯有爲ノ海外移民ヲ増加シテ外國産業ヲ勃興セシメタルモ、將又外國工業ノ競争ナキモノニハ高キ英國工業ノ賃銀ヲシテ外國競争ヲ受クルモノニハ甚ダ低カラシムルモ、一ニ是レ英吉利自由貿易政策ノ賜ナリト説述シテ憤慨ノ極「自由貿易ハ安價ヲ意味ス、特ニ勞働ノ安價、人間ノ安價ヲ意味ス」ト叫ビタル(註十九)ヲ異トセザルヲ得ン。第三階級ノ利益哲學(Liberalteressphilosophie)タルガ爲ニ、其威嚴ヲ傷ケ、其發展ヲ阻碍セラレ、遂ニ其地位ヲ失フナキヲ保セザルモノ、豈我濟經學ノミナランヤ。(註二十)財界ノ明星、天下ノ雄者、泰山北斗ノ觀アリシ大英帝國モ第三階級ノ利害ヲ偏重セル結果、其威嚴ヲ傷ケ、其發展ヲ阻碍セラレ、遂ニ其地位スラ失フナキヲ保セザル窮境ニ陷レルヲ見ズヤ。

註十八 Nineteenth Century & After, 1909, Feb. Art. A German View of the Anglo-German Problem, by C. S. Goldman, p. 351

註十九 Nineteenth Century & After, 1909, Feb. Art. "British

英國商工業衰頹ノ原因略ボ以上ノ如シ。若シ夫レ卑見幸ニシテ太過ナカラシカ、今後ニ處スルノ政策如何ハ自明ノ問題ノミ。何ゾヤ、一ニ曰ク教育制度ノ振興、二ニ曰ク貿易政策ノ改革即チ是レナリ。教育制度ノ振興セザル可カラザルニ至テハ既ニ異論ノ存スルモノアルヲ見ズ。英人保守ノ氣風ヲ打破シ、最新ノ學理ヲ教授シ現在及ビ將來ニ於ケル競争力ヲ増進スル根本的方法ハ之ヲ措イテ復他ニ求ム可カラザレハナリ然レバアスキスノ如キハ

英國ニ取ツテ最大ノ急務ハ眞ニ有效ナル尋常、高等、實業及ビ大學教育制度ノ創設ニアリ。國民教育ノ完備ト否トハ實ニ英吉利ノ興亡ヲ決定ストナシ(註二十一)シエツセツト之ニ和シテ

英國兒童ニ與フルニ完全ナル教育ヲ以テシ、英國青年及ビ實業家ニ授クルニ實務的ニシテ且ツ科學的ナル訓練ヲ以テシ、尙ホ助クルニ適當ナル便宜ト金錢の補助トヲ以テセン

た、世界商戰場裡ニ我が商業上ノ霸權ヲ維持スル事必ズシ  
モ難キニアラズト論シ(註二十二) フレフリー、ローリッ  
トノ二氏亦英國商權ノ繼續ト否トハ實ニ商工業教育ノ問題  
ニ歸スト斷シ(註二十三) 最近倫敦東洋語學研究會會計委員  
會モ獨逸國民ガ東洋ニ於テ常ニ商業上ノ利益ヲ獲得スル所  
以ノモノハ一ニ彼等ガ國語上ノ熟達ニヨルモノナリト論ジ  
テ、派遣地ノ國語ニ素養ナキ人物ヲ海外ニ送ルヲ無用ノ長  
物ナリトナシ、盛ニ日清兩國語ヲ勸奨スル(註二十四)ニ至  
レリ。

然リト雖モ設シ人アリテ唯教育發展ノ一路以  
テ英國現時ノ悲運ヲ挽回シ併セテ其將來ヲ確保  
スルニ足ルトナサムニハ、吾人ハ斷ジテ之ニ反  
對ノ意ヲ表白セザルヲ得ズ。蓋シ教育ノ效力ノ  
現ハル、ハ決シテ之ヲ一年一日ノ短キニ期スル  
能ハザルノミナラズ、今日英國ノ四圍ヲ壓セル  
滔々タル勢力ノ強烈ナル、到底教育ノ一仕事ク  
之ガ襲來ヲ防ギ得ベキニアラザレバナリ。貿易  
政策改革ノ必要茲ニ於テカ起ル。

英國貿易政策改革トハ是レ自由貿易制度廢棄

ノ要求ナリ。國家ノ外國貿易ニ對スル制限干渉  
必要ノ主張ナリ。孤壘ヲ嬰守シテ三十餘年敢テ  
變ゼザリシ操節拋擲ノ要請ナリ。是レ實ニ英國  
現時ノ最大問題ニシテ又縱論橫議最モ喧囂ヲ極  
ムル問題ナリトス。

アベブリー卿ハ英國自由貿易論ノ驍將タリ。

卿一九〇五年自由貿易論一篇ヲ世ニ出スニ當ツ  
テヤ開卷劈頭

人生由來驚駭ニ充ツ。然カモ自由貿易アルガ爲メニ英國ガ  
漸次衰運ニ傾キツ、アリトイヘル思想ノ如ク余輩ヲ吃驚セ  
シメタルモノニアラズ。

ト唱破シテヨリ雄論奔逸、筆端漸ク熟シ來ルヤ  
即チ自由貿易可能說ヲ謳歌シテ

人或ハ說テ自由貿易制度ハ廣ク一般ニ採用セラルレバ良政  
策ナリト雖モ、他國ニシテ保護政策ヲ採用セムニハ不得策  
ナリトナス。是レ妄誕ノ甚シキ而已。知ラズヤ、自由貿易  
ハ所在場合チ通ジテ最良ノ政策タルコトナリ。

ト斷ジ、終ニ

余輩ナリテ見ル、英國ナシテ然ク隆盛ナラシメタル自由貿

易政策ヲ抛ツ可クンバ英國ノ不幸是レヨリ甚シキハナシト結ブ。(註二十五)意氣ノ壯ニシテ、行文ノ快ナルヤ、覺エズ吾人ヲシテ英國尙ホ此ノ人在リ矣ヲ嘆ゼシメズンバアラズ。

註二十一 Jesselt, The Bond of Empire, London, 1902, p. 219

註二十二 Ibid. p. 225

註二十三 Ibid. p. 210

註二十四 明治四十一年九月二十八日大阪毎日新聞二面所載

二十五日發倫敦電報

註二十五 Avebury, 前掲 p.p. 146, & 181

翻テ今這般ノ自由貿易可能論ノ因テ來ル所以ヲ考フルニ先ヅ(一)英國過去ノ繁榮ハ主トシテ自由貿易主義ノ賜ニシテ、加フルニ、(二)英國現在ノ國運ハ自由貿易ニ依テ興隆コソスレ、ユメ衰退セズ。トナシ、從テ(三)今後ト雖モ亦自由貿易主義ヲ保持センニハ永ク其霸權ヲ維持シテ世界ニ雄視スルヲ得ベシト斷ズルニアリ。然ルニ歴史的研究ハ吾人ニ教ユルニ自由貿易主義ノ效績ヲ以テセズシテ、却テ保護貿易主義ノ

效驗ヲ以テス。蓋シ英國ハ遠クエリザベス朝以來極端ナル「マーカンチリズム」ヲ實行シ一八四六年自由貿易主義ヲ採用スルニ際シテハ業ニ已ニ其産業ノ發達世界ニ冠絶シ、全世界ヲ舉ゲテ迫ルトモ、復恐ル、ニ足ラザルノ狀ニアリ。工業ハ勿論、農業ノ如キ亦十八世紀來ノ偉大ナル改良ノ結果他國ノ競争ヲ怖レズシテ「吾人ノ唯一ノ目的ハ英國ノ利益ノミ他國ノコトハ予ニ關セズ」トノ根本思想ヲ有セシ(註二十六)コブデンノ言ノ如ク「穀物條例ノ撤廢ハ「エークル」ダモ英國ノ耕地ヲ減少スルノ憂」ナカリシナリ。(註二十七)一八八二年六月十四日ビスマークガ其有名ナル演說ニ於テ喝破セシ所正ニ事ノ真相ヲ摘羅セリ。曰ク

英國ハ充分保護ノ美果ヲ收メタル後初メテ保護政策ヲ抛テタリ。強キ力士ノ如ク世界ニ横行闊歩シ得ルニ至ル迄、彼ハ實ニ極端ナル保護貿易制度ヲ採リタルナリ。自由貿易主義ハ最強者ノ武器ニ他ナラズ。而テ英國ハ其鐵ト石炭ト其

資本ト港灣ト更ニ其長對ナル地理上ノ地位トニ賴テ世界ノ最強者トハナレリ。然レドモ猶ホ彼ハ其工業ガ然ク優勢トナル迄ハ外國競爭ニ對シ自己ヲ保護スルニ極端ナル保護稅率ヲ以テシタルナリ。

更ニ思フ、ビスマークハ鐵ヲ云ヒ石炭ヲ云ヒ資本ヲ云ヒ港灣ヲ云ヒ且又地ノ利ヲ云ヘリ。然レドモ吾人ハ英國商工業興隆ノ裏面ニハ遙ニ鐵ヲ超エ、石炭ヲ超エ、資本ヲ超エ、港灣ヲ超エ又地理上ノ好地位ヲ超ユル一大勢力ノ儼トシテ存在セシヲ忘ル可カラズ。何ゾヤ武力是レナリ現代國ヲ地上ニ建テ、苟モ商權ヲ擴張セムトスルモノハ須ク先ヅ兵權ノ擴張ヲ要スベシトハ識者ノ夙ニ認ムル處(註二十八)。溯ツテ「マーカンチリズム」ノ時代ニ至ラバ吾人ハ兵權ノ強弱ガ如何ニ露骨ニ又如何ニ直接ニ商權ノ消長ニ影響セシカラ悟ル可シ。

羅馬ハ一日ニシテ成ル可キニアラズ、英國ノ世界的地位亦然リ。乞フラクハ、暫シ吾人ガ英國發展史ニ付テ兵商二權關係ノ跡ヲ尋ネントス

ルヲ許セ。

殖民的發展ノ先鋒トシテ英國ノ敵手タリシ西班牙、葡萄牙ノ二國ハ暫ク措キ、東西兩洋ノ商權ヲ掌握シテ政治的ニ經濟的ニ又精神的ニ世界ヲ風靡シタル和蘭ハ何ガ爲ニ槿花一朝ノ榮トバカリニ凋落シテ最近其後庭(Hinterland)タル獨逸ノ勃興ヲ見ル迄悲境ヲ脱スル能ハザリシトスルカ。是レ實ニ英國ガ盛ニ戰艦ヲ建造シテ和蘭ノ東印度ニ航スル半戰半商ノ艦隊ヲ擊破シタルガ爲ニ非ズヤ。

又人口ニ於テ、歲入ニ於テ、將コルベヤ以來既ニ歐洲第一等ノ工業國タリシ地位ニ於テ、遙ニ英國ノ上ニ位シ、殖民地ニ於テモ、加奈陀アリ、ミシシッピアアリ、ルイジャナアリ、盛榮比ナキ西印度アリ、加フルニ印度ニ於テモ英國ニ先ンジタルノミナラズ、僅ニ二三ノ偉人ヲ數ヘ得タル英國ニ對シ、數多ノ天才ヲ有セシ佛蘭西ガ二百餘年ノ惡戰苦闘ノ後英國ノ名ヲナサシ

メタルハ抑何故ナリシトスルカ。コレ史家ノ云ヒケム如ク佛國ガ二兎ヲ追ヒタルノ誹ヲ免ルルニ由ナキ結果海上戰鬪力ノ薄弱ニシテ英國ニ敵スル能ハザリシガ爲ニアラズヤ。シーレーノ卓拔ナル史論ノ一節

各國ノ目的ハ人類ノ欲望ニ對シ財ヲ供給シテ貿易ニ進歩セシメントスルニアラズシテ、新世界ニ於ケル富裕ナル地方ノ排外的占領ニ依テ貿易ヲ發達セシメントスルニアリシ時代ニ於テハ、本來ノ性質ヨリスレバ平和ヲ増進スベキモノナリトハ云ヘ、貿易ハヤガテ戰争ト同意義ニシテ、貿易アル處必ズ戰争ヲ惹起セリ。十七世紀ハ英國ガ益々商業國化セシ世紀ニシテヤガテ又愈々好戰國化セシ世紀タリ。實ニ當時ノ英國ニ取ツテハ戰争ハ徹頭徹尾一個ノ産業ニシテ致富ノ道タリ、最も繁榮セシ事業ニシテ又最も有利ナル投資タリシ也。(註二十九)

ヲ聽イテ而テシユルツエ、ゲヴァーニツツノ斷案

史乘ノ回顧ハ吾人ヲシテ英國ノ世界的霸權ノ確立發展ニ要シタル幾多ノ星霜中ニハ政治上ノ方針其宜シキニ適ヒタルモノアルニ想到セシム。即チ彼ガ競爭國ヲ壓倒スルニ至リ

シ主要ナル理由ハ其戰鬪力遙カニ他國ノ上ニ駕シタルニ歸ス(註三十)  
ト云フニ還ランカ、商權ト兵權トノ間ニ竊ム微妙ナル消息ハ自ラニシテ明瞭ナルヲ得ン。

註二十六 神戸正雄氏 穀物關稅論四頁

註二十七 日本經濟新誌第一卷第十二號所載關講師「コブデ

ンノ自由貿易論」參照

註二十八 東京經濟雜誌第一千五百十七號所載拙稿「帝國主

義論」(三)ニ於テ不充分ナガラ幾分ノ説明ヲ試ミタリ

註二十九 J. R. Soley, The Expansion of England, London,

1899 p. 128—130

註三十 Schulze-Gaevernitz, a.a.O., S. 18

地ハ是レ彈丸黑子ノ小島ナリト雖モ、南歐ト北歐トヲ連ネ、歐洲ト新大陸トヲ結ブ海路ノ要衝ニ當ツテ、船舶ノ輻輳スル所、貨財ノ集散スル處タリ。人ハ是レ一面ニハ規律ヲ重ンジ習慣ヲ守ルノ精神ニ富ムト共ニ他面冒險ヲ喜ビ開拓ヲ希フノ企業的人民タリ。國ハ是レ西班牙ヲ破リ和蘭ヲ斃シ、而テ佛蘭西ヲ降セルノ雄邦タリ。

其工業ハ是レ産業革命ノ先頭ニ起ツテ其最初ノ成果ヲ收メ得タルモノ、加フルニ歷代爲政治家ノ機宜ヲ得タル經濟的權力の保護ヲ以テス。天ノ時ト地ノ利ト人ノ和トハ其併セ備フル所。英國ノ産業興ラザラムト欲スルモ得ザルナリ。

夫レ自由貿易ハ最強者ノ最良武器ニ外ナラズ四方ノ邦國皆能ク敵スルナキヲ看破シタル英國ハ茲ニ毅然トシテ穀物條例ヲ廢止シテ高ク自由貿易ノ旗幟ヲ掲ゲタリ。時正ニ是レ一八四六年數年ナラズシテカリフォルニア及ビ濠洲ニ金坑ノ發見セララル、アリ、鐵道日ニ敷設セラレ、海運ノ發達月ニ著シク、水力及ビ瓦斯ノ利用亦始マレリ。世界經濟ノ進歩ハ實ニ順風滿帆、千里ノ江陵一日ニシテ悉キムノ慨アリ。英國ノ霸權ハ牢トシテ遂ニ動カス可カラズ。然カモ眼ヲ舉ゲテ歐洲ノ天地ヲ眺ムレバ戰雲漠々、後年ノ勁敵獨逸ノ如キハ未ダ荒漠タル平原ニ位スル一農業國、戰備ニ汲々トシテ復他ヲ顧ミルニ遑アラ

ズ。轉ジテ米大陸ヲ見シカ、北米合衆國新進ノ氣鋭ナリト雖モ、未ダ以テ世界經濟ノ一方ニ覇タルニ足ラズ。墨西哥ノ如キハ戰亂叛逆相踵ギテ國力疲弊、南米ノ諸邦ハコレ未開半開ノ蠻地到底一瞥ヲダモ値セズ。世ハ斯シテ方ニ英國獨尊ノ時代。四海ノ民ハ聲ヲ舉ゲテ英國ノ隆昌ト光榮トヲ謳ヘリ。

茲ニ至ル、英國過去ノ繁盛ノ原因ヲ一自由貿易主義ニ求ムルノ誤レルヤ既ニ明ナリ自由貿易ノ主義ハ實ニ保護貿易主義ノ成果ヲ收メ幾多非常の原因ニ助ケラレテ始メテ燦然タル美花ヲ開キタルモノ、英國ヲ世界ノ工場トナセシ工業的活動ノ堅固ナル發達ト急激ナル膨脹トガ非常ナル保護制度ノ下ニ起レリ」シコト、豈カンニングハムヲ俟テ初メテ知ル可キ所ナランヤ。(註三十二)近視ナルモノ之ヲ是レ曉ル能ハズシテ唯自由貿易ニ心酔シテ其及バザラムヲ恐ル憫マザル可ケムヤ。

假ニ百歩ヲ讓ツテ自由貿易主義ニシテ所在場合ニ最良ノ政策ナリト許サムカ、一八一八年ヲ以テ自由貿易化セル普魯西ハ業ニ早ク英吉利ニ一步ヲ先ンジテ隆興ノ機運ニ向ヒタルベキノ理ナリ。然ルニ事實ハ豫想ニ反シテ普國工業ハ頻リニ先進英國工業ノ壓迫ヲ蒙リテ永ク勃興ノ途ヲ失ヒ、一八七九年保護政策採用ノ時ニ至ル迄些ノ盛觀ヲ呈セザリシニアラズヤ。

固ヨリ吾人ハ保護貿易政策ノ可能ヲ信ズルモノニアラズ。然レバ吾人ハ英國ノ保護貿易政策ガ其前日隆昌ノ一原因ナリト云ヒテ、ソノ唯一原因ナリトハ云ハズ。又英國ノ自由貿易政策ガ今日衰退ノ一原因ナリト云ヒテ、唯一原因ナリトハ云ハズ。保護ノ效果ヲ過重視セザル吾人ハ又自由ノ效果ヲモ過重視セズ。斷乎トシテ自由貿易可能論者論據ノ第一點ヲ批駁スル所以也。進ンデ第二點タル英國現在ノ國運ハ自由貿易ニ依テ振興コソシタレ、ユメ衰退セズトノ所説

ニ付テハ上來吾人ガ極力叙述シタル所、敢テ多辯ヲ要セズシテ根本的ニ誤謬タルヲ知ルベシ。更ニ進ンデ今後英國ニシテ自由貿易主義ヲ株守セムニハ、其產業ノ霸權ハ日ニ月ニ凋落シテ雷ニ世界ニ雄視スルヲ得ザルノミナラズ、或ハ其衰滅ヲ招カムノ恐アリトハ是レ亦吾人ノ既ニ論議シタル所ナリ。

論據悉ク破ル、コト此ノ如シ。此ノ論據ヲ基礎トシテ成立セル自由貿易可能論ノ運命ヤ自ラ知ルベキノミ。

惟フニ自由ト叫ビ保護ト呼ブ。其ニ是レ主義ノ問題ニ非ズシテ政策ノ問題ナリ。既ニ然リ、洋ノ東西ニ拘ハラズ、時ノ古今ヲ論ゼズ、終始一貫絶對不變ノ原則何ゾ存スベキノ理アラムヤ唯望ム所ハ時代ノ變遷ニ伴ヒ、經濟組織ノ發展ニ應ジテ、時ニ放任シ、時ニ干涉シ、以テ自國政治經濟的權勢ノ發揚ヲ期スベキニアリ。然レバ世界ノ王冠其頭上ニ輝キ四海ニ横行シテ恐敵

存セザリシ英國ガ斷乎トシテ保護干涉ノ壘ヲ出  
デ、自由競争ノ野ニ現ハレタル、是レ理ノ正ニ  
然ル可キ所、必ズシモハスキッソン ビールヲ  
俟タズ、コブデン グラッドストンヲ要セズ。  
更ニ時代一轉、強敵四方ニ崛起シ敢テ鼎ノ輕重  
ヲスラ問ハレムトスルニ當テ、保護熱ノ復活ヲ  
見ル、亦勢ノ然ラシムル所、ハルフオーアナリチ  
ヤンパーレーンナシト雖モ、時勢ノ推移ハ遂ニ  
茲ニ達セズシテ止ムベキニ非ズ。

・聞説、自由貿易改革ノ殿將グラッドストンハ  
一八九六年遙カニ書ヲ佛國ノ同志レオン、セイ  
ニ寄セテ、告グルニ自由貿易主義ノ將來ニ對ス  
ル綿々タル悲觀ノ情ヲ以テセリト。(註三十二)嘆  
ズル者ノ非カ、嘆ゼシムルモノ、非カ。吾人は  
レヲ知ラズ。唯竊カニ千古ノ偉人ヲシテ尙ホ此  
嘆アラシメタル時代ノ趨勢ヲ悲ム。(未完)

註三十一 W. Cunningham, The Rise and Decline of the Free  
Trade Movement Cambridge, 1905, p. 31

註三十二 其書ニ曰ク「最近三十年間ニ於テ歐洲大陸諸國ノ

ミナラズ、世界ノ各部分ニ「アングロサクソン」民族ノ  
建設セル諸國ニ於テサヘ吾人同志ノ地歩ヲ失フコト幾  
何ナルヤナ知ラズ。  
今ヤ余ガ故國タル英國獨リ其殘壘ヲ擁スルモ思フ將來  
ニ驅スレバ此故國サヘ孤忠ヲ盡スヤ否ヤ計ル可カラザ  
ルモノアリ云々ト」。